会場プリムローズにて

雪やこんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
会場プリムローズにて

【Ｎコード】
Ｎ８３５０Ｃ

【作者名】
雪やこんこ

【あらすじ】
玉の輿に乗った姉の披露宴会場。スピーチでどれだけ猛アプローチを仕掛けたのか暴露され、新婦の妹である私はちょっと決まりわるい思いをする。そう。昔から姉には狙った獲物をどんなことをしても手に入れるところがある。それと……。

披露宴会場プリムローズはテーブルクロスから各テーブルに飾られた花やキャンドルなどの小物に到るまで、全て軽やかなピンク系の色でまとめられていた。姉の甘甘な少女趣味に見事答えた会場装飾と言える。出席者の約半数を占める男性陣はなんだか居心地悪そうにみえる。なんだか女子トイレに閉じ込められた男子みたいだ。それを除けば姉の結婚式は順調に進んでいた。それほど美人でもスタイルが良いわけでもない姉だったが、ここ3ヶ月ほど通ったエステの成果だろうか、それなりに見られる花嫁姿を披露している。

かすかに暗雲が立ち込めたのは、新郎側の友人のスピーチのときだった。紹介に寄れば職場の同僚らしい。１００人近い招待客の前でも臆することなく話し始めた物腰はスマートで、ちょっとタイプかも、と思ったが、そのスピーチ内容にげんなりした。新郎と新婦の思い出、といえば聞こえはいいが、要するに姉がどれほどの猛アプローチをしかけたかという暴露話だった。

昼になると新婦手作りの弁当が差し入れられていたこと。職場の飲み会情報をいつのまにか手に入れ、欠かさず参加した上、いつも新郎の隣の席をキープして他の女を寄せ付けなかったこと。新郎の残業中に３０分にいっぺんくらい新婦からの電話がかかってきて、上司が借金の取立てと勘違いしかけたこと。エトセトラ、エトセトラ。

式のはじめに、司会者が二人の馴れ初めについて、「同じ職場に配属されたところから自然に交際が始まり」といったときに、新郎の同僚が集まったあたりで感じ悪い笑いが起きた理由が今やっとわかった。

確かに私たち家族も、「自然にお付き合いが始まって」と言うのは不自然だとは思っていた。同じフロアならまだしも、姉の職場で

ある受付は一階ロビーに、新郎の職場は上層階にあった。自然に距離を縮めるには遠すぎる。

それに、読書とクラシック音楽が好きな新郎と本嫌いでパンクロックが好きな姉。趣味もあわなそうな二人がどうやって自然に、と不思議に思っていたのだが、なるほど、姉の一方的な努力の積み重ねがあったのね。

名もない短期大学を普通に出たが、就職に失敗、派遣社員として数回会社を転転としながら、くすぶった日々を送っていた姉が、一流企業の受付に派遣されたのを期に、そこに勤めるエリート社員を捕まえるべく、頑張ったであろうことは想像にかたくない。

私はちょっとため息をついて、遠く金屏風の前の姉に目をやった。清楚なレースのウェディングドレスの姉は、他人の話を聞いているかのように微笑んでいる。見ようによってはふてぶてしい。

確かに、姉は欲しいものがあると手に入れなければ気がすまないタイプの人間だ。普段はおせっかいなくらい親切で、気配りをしてくれる優しい姉なのだが、ひとたび何かに夢中になると急にはた迷惑なエゴイストになる。子供のころは、人形の服だの可愛いバッグだののためにデパートの床を転げまわったり、泣き喚いたりと、すさまじい駄々をこねた。両親は、姉をデパートに連れて行くとき、心なしかおびえていたものだ。ただ、姉のえらい所は絶対に万引きをしないことと、駆け引きをしないところ。誰かが持っているからとか、流行っているとかの理由をつけたこともない。どんなときでも私はこれが気に入ったから手に入れたいの一点張りでおしまくった。姉とは対照的に冷めた子供だった私は、ある意味潔いなあ、と感心していたものだ。

姉の猛アタックの話は招待客には受けているものの、新郎側テーブルは静まり返っている。ただでさえ姉は向こうの家族に受けが悪

いらしいのに。こんな話をされたらますます印象が悪くなりそうだ。ああ。いたたまれない。
新婦側親族のテーブルは聞きたい派と聞きたくない派の二つに分かれていた。
「すごいわねえ。あなたもあのくらい頑張っていいだんなさん見つけないとね」
隣の席の伯母さんが、にやにやしながら私の顔を覗き込む。これからずーっと会うたびに、この話をされると思うと気が重い。私はげんなりしながら、適当にうなづいた。その向こうに座っている伯父さんも、目は料理を見ているが、意識はスピーチに集中している。笑うタイミングがそれを物語っている。その向こうに座っている義姉に到っては、完全に食事の手を止めて聞き入っている。この人のこういうところ嫌いだ。ありがたいことに姪の小百合ちゃんは、何も気にせず豪快にハンバーグにかぶりついている。
「こら。パパが一口サイズに切ってやるから。いっかいお皿におきなさい」
兄はさっきから娘の口を拭いたらり鼻をかんでやったりと、必要以上に娘にかまっている。やっぱり兄としては聞きたくない話らしい。
ふと両親の方を振り返ると、こちらは完全に聞きたくない派。父は手勺でワインをがぶ飲みし始めているし、母もテーブルに飾られた花の種類をつぶやきながら、ナプキンに書き込んで現実逃避を図っている。私も席次表やメニューをみながら、続くスピーチに耐えることにした。そういえば、この表彰状みたいな金の唐草模様がついた席次表は一枚３００円、同じデザインのメニューは４５０円しているらしい。ちなみにテーブル中央のフラワーアレンジメントは一卓につき７０００円だ。まあゴージャス。私がテーブルごとの経費の暗算という意味無い作業を終えたころ、ようやくスピーチのタネが尽きたらしく、男は顔をてらてらさせて、こう締めくくった。
「幸せの蟻地獄にはまった新郎のことですから、もう抜け出せません。どうかお幸せに」

会場は一部を除いて笑いと拍手に包まれた。

「では皆さんしばらくご歓談ください。」

お色直しの為、新郎新婦が退場の後、会場がざわめきだした。さっきのスピーチの余韻か、みんながこちらを盗み見てひそひそ話をしている気がする。

新郎側テーブルにいた禿オヤジが

「ほんとうに蟻地獄って感じだよなあ」

と大声で隣の奥さんらしき人に話し掛けていたが、すかさず睨みつけた私と目が合って「おっとっと」とわざとらしく口を押えてみせた。

隣の席の母が軽く私の二の腕を叩いて、小声で囁いた。

「あんまり睨まないの。あの人かなり酔ってるみたいだし」

「だってさ。あんな言い方しなくってもいいじゃん」

私も声をひそめて、口を尖らせた。

「そりゃあ、たしかにお姉ちゃんは強引だっただろうけどさ。でも、ああいう言い方はひどいよ」

母は唇の前に人差し指を立てた。

「途中経過は言いっこなし。結果が全てよ。ちゃんと合意の上で結婚したんだから。お姉ちゃんの勝ち」

私はちょっと噴出した。

「おかあさん。その台詞は悪役っぽいよ」

「そうねえ」

母も少し笑った。

「しかし本当にあのこ、狙った獲物は逃がさないタイプねえ。昔からそうだったけど。ほら縁日でのこと覚えてる？」

「ああ、小学校のころの？」

母のお気に入りの話はいくつかある。お姉ちゃんが幼稚園でおもらしして、ノーパンのままで遊んでいた話とか、私が運動会の行進途中で両親に手を振ったためバランスを崩して思いっきり転んだ話

なんかもお気に入りだが、やはり一番は、金魚掬いの話である。我が家の歴史の中ではもはや伝説となっている。

まだ私が小学校一年のころだから、姉は2年生、兄は4年生のときだったと思う。割りとけちな我が家には珍しく、そのときは兄弟3人ならんで金魚掬いをしたのだった。

私は最初の1掬いでポイを破いて早々にリタイア。兄は手堅く2匹掬い上げた。ところが姉はいつまでたっても掬い始めようとはしなかった。

姉は動き回る色とりどりの金魚たちの中の一匹に目をつけていたのだ。それは珍しいことに他の金魚より尻尾がながく、しかもかなり元気だった。その一匹以外目に入らなくなった姉は金魚が気ままに移動するたびに、それを追って右に左に移動した。こうなると回りのことなんて目に入らない。並んでいるところに割って入ったり、隣の子を肘で押したりするので、両親が交互に叱ったが、一向に聞き入れる気配がなかった。お店のおじさんがたまりかねて、ネコなで声で「おじょうちゃん。ねらっているのがあるなら、おじさんが取ってあげるよ」と申し出たのだが、姉は「自分で取る」と、にべもなく断った。

結局兄と私は父に連れられてお祭りを一周することになり、その場には母が残ったのだが、姉のその後がすごかったらしい。浴衣の帯が解けてパンツ丸見えという状況をものともせず、狙った金魚を追いつづけた。その後一時間くらい柄の部分で狙った金魚追いまわして、弱った所を端っこに追い詰めてやっととったらしい。掬った金魚を入れるボウルを半分沈めていたけど、お店の人も見ないフリをしてくれたとか。

「お母さんその話好きだよね。」

「それぞれの個性がよく出た話だもの。とくにお兄ちゃんが言った

一言が良かった」
「どんなこと言ったっけ？　」
「お姉ちゃんが金魚が遠ざかったのを見て場所を変えようとしたときにね、その肩をつかんで『おまえ、金魚掬いっていうのはな、手近な金魚を取るのがマナーなんだよ。みんなの邪魔だろ』って。お姉ちゃんはさっと振り払ったけど。」
　何がおかしいのか、母はくすくす笑った。
「また同じ話で笑ってる」
「だって、おかしいじゃない。子供にいえることじゃないわよ。今思えばなんか、その後の人生を暗示してるみたい」
「人生ねえ」
　私は向かいがわの席に並んでいる兄一家を眺めた。顔が似ているわけではない兄夫婦なのに、間に小百合ちゃんをはさむと似ているような気がするから不思議だ。
　兄は普通の大学を出て、近所の会社に就職し、義姉さんと職場結婚した。私は兄の結婚式の受付にいたのだが、芳名帳に書かれた住所の８割近くが同じ市内だったのを見て驚いた記憶がある。たしかに手近でまかなっている。
　無理せず着実に生きてきた兄。多少無理めでも目標に向かって突っ走る姉。そこまで考えて、私はあることに気がついた。
「でも私にとっては不吉じゃん。金魚一匹も取れなくて大泣きしたんだよ」
「まあ、小さかったからねえ。」
「そんなの人生の暗示にされたら迷惑だよ。納得いかない」
「まあまあ。そうならないように努力しなさいということよ。ほら、もう音楽止まったから、そろそろお姉ちゃん達戻ってくるわよ」
　母は強引に話をすりかえた。
　司会者がマイクの前に立ったのを見て、私は急いで母に聞いた。
「そういえば、そのときの金魚どうした？うちで飼った記憶ないけど」

「忘れたの？次の朝には死んでたじゃない。お姉ちゃんは手に入れたら、もうほったらかしなんだから」

照明がゆっくり落とされ、司会者の声が響いた。

「新郎新婦のご入場です。拍手でお迎えください。」

英語の甘ったるい歌が流れ始め、扉が大きく開かれた。姉は深紅のド派手なドレス。新郎は白のタキシード。拍手とカメラのフラッシュの中、二人は手を組んでひな壇に向かって歩き始めた。姉の着ているドレスの広がりに押されてか、新郎の歩みはぎこちない。

暗がりの中でスポットライトを浴びる姉の満足げな笑みを見て、ふとある光景を思い出した。そう。あれは縁日からの帰り道でのことだ。

両親の小言などどこ吹く風で、姉は出店のライトで明るくなった所に立ち止まっては、金魚の入ったビニール袋を目の高さに持ち上げて、うっとりと見つめていた。捕らわれた戦利品は、既にかなり弱っていて水の中で為されるがままに揺れていた。あのときの傾いたままの金魚と今の新郎の姿が、なぜかダブってみえて、私は少し寒気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8350c/

会場プリムローズにて

2011年1月5日05時47分発行